

日本アジア投資株式会社 2019年3月期 期末決算説明会
質疑応答 要旨

2019年5月16日（木）開催

Q1：2021年3月末のプロジェクト投資資産の残高90億円の内訳は？メガソーラーだけではここまで残高を増やせないのではないか？

A1：メガソーラーへの投資機会は十分に存在する。

- ✓ 電力の固定価格買取制度による買取価格（FIT）が低下しているため、メガソーラーについて心配する声を多く聞くが、FITが高い（30円台以上）プロジェクトへの投資機会は、当社の人員・資金力では余るほど十分に存在する。よって、再生可能エネルギーの中ではメガソーラーを最優先とする。
- ✓ その他の電源では、バイオマス・バイオガスに注力する。メガソーラーよりもFITが高く、また、天候に左右されず夜間も発電するため、同じ規模の発電所でも発電量はメガソーラーの4~5倍となる。

Q2：新たに開始したスマートアグリプロジェクト（植物工場）のビジネスの可能性は？

A2：かなり高いと期待している。

- ✓ 植物工場の運営で実績のあるベンチャー企業の、(株)森久エンジニアリングと協業する。第1号工場が2019年3月操業開始。完全閉鎖型の工場で、LEDライトなどを用いて、リーフレタスなどの野菜を栽培する。土を使わずに水や養分の供給も自動化しており、非常にイノバティブな事業である。
- ✓ 工場栽培の野菜は、路地栽培に比べ、大きさ・重量・品質・数量・価格が安定している。また、完全密閉型で土も利用しないため、衛生面でも優れている。
- ✓ 販売先は外食・中食企業やコンビニエンスストアなど。これらの企業は、一般消費者と異なり、仕入れの安定化や洗浄にかかる人件費・水道代が削減可能なため、工場栽培野菜へのニーズが高い。また、近年の天候不順で廃業された農家が多かったことも、工場栽培へのニーズが高まっている一因。
- ✓ メガソーラーのようにFITは無いが、収益性は同程度かそれ以上である。足元では出荷が順次始まっており、今後も販売ルートを確保できれば、大きく成長すると期待している。

Q3: アジアをテーマとした 2 つのファンドを企画中だが、その狙い、規模、設立の時期は？

A3: アジアの成長力を用いて、日本企業の成長性を高めることを目的としたファンドである。いずれも年内の設立を目指している。

- ✓ 当社は「日本アセアン投資」として貿易黒字のアジア還元を目的に設立された会社であり、遺伝子的にアジアの成長に貢献する事業を志向している。企画中の 2 つのファンドもその経緯で設立する。ただし、今では、日本の成長性が長らく低迷しているため、アジアの飛躍的な成長力を借りて、次なる成長を求める日本企業を支援する。
- ✓ 1 つは日本の中小企業のグローバル化（海外進出・インバウンド需要取り込み）を支援するファンド、もう 1 つは日本のハイテク企業の中国市場での成長を支援するファンドである。
- ✓ 前者のファンドは、国内の地域金融機関からの出資を期待している。後者のファンドは、中国の投資家から出資意向を受けており、当社とその投資家の 2 社で設立する方針。どちらのファンドも年内の設立を目指している。

Q4: プロジェクトの投資計画が同一であるのに、先行開発コストが増加する理由は？

A4: 採算性のシミュレーションを見直した結果である。

プロジェクト全体の採算性は変わらないものの、利益の発生する時期が当初よりも後ろ倒しになった。20 年程度のプロジェクト期間のうち、前半の開発コストが増加し、他方で後半の利益の額が増加した。

Q5: 2021/3 期の業績目標である最終利益 7 億円の確度は高いと見て良いか？

A5: プロジェクトの柔軟な売却方針で達成する。

- ✓ プロジェクトの先行開発コストをどのようにカバーするかが今後の課題となる。今回の計画では、プライベートエクイティの株式売却益を収益の柱としており、プロジェクトの売却は株式売却の下振れを支える位置づけとしたためネガティブな印象を与えたかもしれないが、柔軟な売却方針を採っているとご理解いただきたい。
- ✓ 投資候補先となる好条件のメガソーラープロジェクトがあれば、まずは投資を行い、発電所を完成させた後、短期売却か長期保有か検討して相応しい方を選択していく。
- ✓ 現在は、植物工場などの新規投資候補となるプロジェクトが存在するため、売却で得た資金を再投資に回すことで、売却せずに保有していた場合に将来得られる安定収益以上の利益を再投資先のプロジェクトで獲得できる。
- ✓ プライベートエクイティの株式売却益はコントロールができないので、その他の部分で一定の利益を出し、株式売却益はアップサイドの期待となるようにしていきたい。

以上